大塚ホールディングス株式会社発行
『大塚薬報』2023年12月号（No.791）より

湯滝

草津温泉の歴史地理

地域資源としての温泉と共同浴場

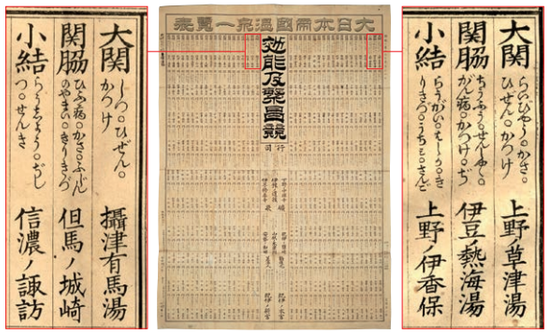
文・関戸明子　写真・小椋たかし

日本の名湯の一つとして名高い草津温泉。江戸中期より明治末期まで刊行されていた温泉番付には、草津が最高位である東の大関にあった。草津温泉では「泉質主義」を宣言しており、温泉そのものの違い―「自然湧出泉として湯量日本一」、「源泉100%掛け流しの天然温泉」、「強力な殺菌力を誇る温泉」―の3点を発信して、ブランドイメージを高めている。草津温泉のシンボル、温泉街の中心にある源泉の湯畑は、草津に固有の温泉文化を表象する風致景観として、2017年（平成29）に国の名勝に指定された。ここでは、歴史地理学からのアプローチによって草津温泉の諸相を紹介していく。

湯畑の中に四角に組まれた木の枠が沈んでいる。
この木枠の中の湯を「御汲上の湯」と呼んでいる。

草津温泉の歴史地理

夜の温泉街



大日本帝國温泉一覧表

効能及泉質表

大関 しつ。ひぜん。かつけ　摂津有馬湯
関脇 ひふあ。かさ。ふぶん。のやまい。きりきず　但馬ノ城崎
小結 らうもうそう。ぶし つ。せんき　信濃ノ諏訪

大関 ららひやう。かさ。ひせん。かつけ　上野ノ草津湯
関脇 ちうふう。せんそく。がん。かつけ。ぢ　伊豆ノ熱海湯
小結 らうがい。そーろう。きりきず。うちとしさんと　上野ノ伊香保

島崎直次郎編「大日本帝国温泉一覧表」1888年（明治21）（筆者蔵）
編集兼出版人の島崎直次郎の住所は愛媛県道後湯月町で、道後温泉は図中央の行司となっている。左右にそれぞれ20カ所、10段の温泉が記載され、左上には豊後・浜脇が張り出されており、401の温泉が番付に並ぶ。行司など8カ所を加えれば409の温泉を数える。大関は草津と有馬、関脇は熱海と城崎、小結は伊香保と諏訪となっている。

地形図にみる温泉街の発展

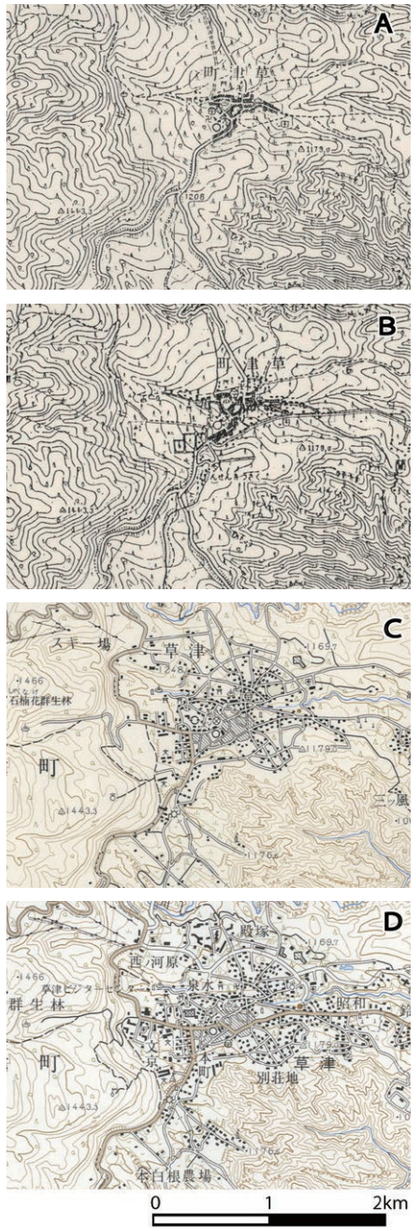
草津温泉は群馬県の北西部、草津町に位置する。コロナ禍以前の2019年（平成31、令和元）度における宿泊客数は2,244,132人、日帰客数は1,027,514人であった。草津町の人口は6,049人であり（2020年国勢調査による）、住民1人当たりに換算すると、371人の宿泊客を受け入れたことになる。また、就業人口3,364人に対して、宿泊業・飲食サービス業に従事する人は1,577人を数え、その割合は47％と高く、温泉観光に特化している。

まずは5万分の1地形図（**図1**）から地域形成の過程を概観しておきたい。草津の温泉街は草津白根山の東麓、標高1,100～1,200mの高原に広がっている。草津白根山は日本でも有数の活動的な火山である。温泉は地下において熱と特有の成分を得ることによって生成され、温泉伏流水が湯畑や万代鉱などで地表に湧出している。

1912年（大正元）のAでは、西から東へ流れる湯川の谷に沿って、主要な源泉である湯畑を中心に小さな市街地が形成されている。草津から北西に伸びる道が二重線になっていて、自動車交通以前の長野県方面へ向かう主要道であったことがわかる。

1937年（昭和12）のBでは、草津電気鉄道の路線と「くさつおんせん」の駅名がみえる。市街地もやや拡大している。1930年代の草津には多くのスキー客が訪れており、西方の山麓にはスキー小屋が設けられていた。ただし、地形図にみえる索道は、スキー

図1　5万分の1地形図「草津」



A：1912年測図
B：1937年修正
C：1974年編集
D：1997年修正

リフトではなく、硫黄鉱山から鉱石を運搬するためのものである。草津白根山の周辺には多くの硫黄鉱山が操業していたが、石油や天然ガスを精製するときに分離・回収された硫黄が安価に生産されるようになると、価格の面で競争に勝てず、1970年（昭和45）前後までに次々と閉山した。

1974年（昭和49）のCでは、市街地が大きく拡大している。南東部の高台は1970年代に開発が始まった別荘地である。南から草津に至る道路は1964年（昭和39）に全面舗装されて草津道路（一般有料道路）となった。翌年には志賀草津高原ルートが開通し、1970年の全面舗装後に有料となった。Cでは有料道路の地図記号が確認できる。これらは1990年代初めに無料開放された。道路整備が進んだ一方、草軽電気鉄道は1962年（昭和37）に廃止された。戦後、草津の発展に大きな役割を果たしたのはスキー場の開発であった。日本最初のスキーリフトが1948年（昭和23）12月天狗山に建設されたことに始まり、ゲレンデとリフトが整備されていった。

1997年（平成9）のDでは、温泉街北部の外周道路ベルツ通りの整備が進んでいる。西方の石楠花群生林の南にある温泉マークは万代鉱源泉で、1972年（昭和47）に草津町が掘削・開発を行い、2年後に給湯が開始された。ベルツ通り沿いと西部の高台には万代鉱源泉を利用するホテル、ペンション、リゾートマンションが建てられた。なお、2018年（平成30）1月の本白根山噴火の影響で、草津国際スキー場は縮小され、現在は草津温泉スキー場となっている。

文化7年「上州草津温泉大図」を読む

1枚の絵図を手がかりに、草津温泉の歴史の一端をたどりたい。

「上州草津温泉大図」（**図2**）は、刊年が記されている草津の絵図の中で最も古いものである。図の上部には「文化七年改」（1810年）とあり、元の図はそれより前に刊行されていたと考えられる。この図は参詣曼荼羅図に近い印象を与える。手前に湯滝に打たれる修行的な場面、背後に人びとの病苦を救う薬師如来を本尊とする薬師堂を大きく描いた構図は、宗教的意味合いが強いものとなっている。そして中央にある温泉の湧出地（現在の湯畑）が大きな面積を占める。ここは柵で囲われており、大きさは縦42間（約76m）、横12間（約22m）とあり、その周囲に浴場が並んでいることがわかる。

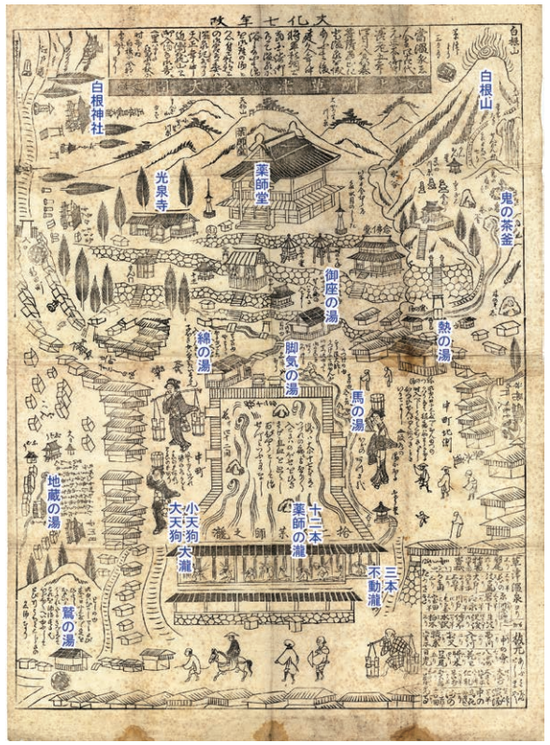


図2 「上州草津温泉大図」1810年（文化7）、縦73cm×横54cm
（筆者蔵。青字は筆者による加筆）

図のタイトルの上には、温泉の由来が掲載されている。そこには、元正天皇のとき、養老5年（721）4月8日、行基が当山に登り温泉を試したことに始まり、建久年中（1190～1199年）に源頼朝が入浴し、その湯を御座の湯と名付け、頼朝の宮があると記されている（**表1**）。さらに、天正年中（1573～1592年）に近衛龍山（前久（さきひさ）、1536～1612）の入湯があったとし、和歌を掲載している。

行基による開湯を伝える説は721年と一定で、4月8日は薬師堂の縁日であった。源頼朝の来浴は、『曾我物語』にみえる浅間山北麓の三原での狩りの折、1193年（建久4）とする案内書が多い。近衛前久は1554年（天文23）19歳で関白左大臣となったが、のちに出家して龍山と号した。草津には1587年（天正15）に訪れており、龍山が薬師堂に献じた和歌10首が光泉寺に伝えられている。

共同浴場には由緒や効能の記載があり、次のように案内されている（**表1**）。瀧の湯には大小17本の

草津白根山・湯釜　※草津白根山では火口から半径500mの範囲で立ち入り規制が行われており、現在、湯釜の見学はできない。

表1 「上州草津温泉大図」（1810年）にみる由来と共同浴場の説明

由来	当温泉は、人皇四十四代、元正天皇御宇、養老五年四月八日、行基菩薩当山に登、温泉を試給ふ、其後建久年中、将軍頼朝公、当国彼御有て温泉に浴し給ふ、其湯を御座の湯と名付て頼朝公の御宮有、委ハ温泉記ニ有り、天正年中、近衛龍山公、御入湯有、御歌ニ　▲里ハまた紅葉の秋に　時しらぬ　白根に今朝ハ　雪ぞふりけり
瀧の湯	瀧ハ大小十七本有、いづれの病ニも、をりをり入ときハ、のぼセをひきさげ、気血を廻らし、百びやうとして治セづといふ事なし
御座の湯	むかし頼朝此ゆに入給ふ、なん病の人ハ、これに入てよし
熱の湯	此ゆハ日に三度づゝ、おんねつのかハり有て、眼病ハやわらかなる時入べし、うちミ、くぢきニよし、しつ、ひぜんニハごくあつきとき、いりてよし
綿の湯	やわらかなるゆニ、てよハき人、ひへしやうの人、心長く入ハ、げんきをまし、子なき女ハくわいたいする也
脚気の湯	こう法大師、かつけにて御なんぎのセつ、此ゆニて御くわいきあり、かつけとしやく、つかへの名湯なり
鷺の湯	此ゆハむかしわしとび来て、日に三度づゝ足をひたし、人々ふしぎにおもいミれバ、てつぽうニうたれたるきづ有て、これを湯治する也、ほどなくへいゆにしてとび行、うちみ、くじきの名湯なり
地蔵の湯	むかしこゝに虫の病有、人一七日こもり入ニ、まんずるにゆめのつげに、此下におんせん有、これに入時ハむしのねを切也、無病の人おりおり入バ、道中ニて雨風にあたりてもゆハもどらづ、じそうのセいがん也
馬の湯	馬の病ニ入て吉

（読点を適宜加えた）

草津温泉の歴史地理

図3 「湯つぼ」 瀧の湯に打たれる様子
十返舎一九『諸国道中 金の草鞋 十三』
1820年（文政3）（早稲田大学図書館蔵）

十返舎一九の碑

滝があり、逆上（のぼせ）を引き下げ、気血を廻らし、百病も治せないことはない。御座の湯はむかし源頼朝が入湯した、難病の人はこれに入るとよい。熱の湯は日に3度温度が変わり、眼病はやわらかな時に入る、打ち身・挫きによい、湿・皮癬にはごく熱いときに入るとよい。綿の湯はやわらかな湯で、弱い人・冷え性の人が長く入れば元気を増し、子どものいない女性は懐胎する。脚気の湯は弘法大師の脚気が快気した名湯で、脚気・癪・つかえによい。鷲の湯はむかし鷲が鉄砲に撃たれた足の傷を癒やしたことがあり、打ち身・挫きの名湯である。地蔵の湯は地蔵の誓願にかかわる由緒があり、虫の病を治す。馬の湯は馬の病に入るとよい。なお、ここは脚気の湯の流れの下にあり、文字どおり馬用の温泉であった。

十返舎一九の道中記『諸国道中 金の草鞋 十三』（1820年）では、善光寺参りの帰路に草津に立ち寄っており、瀧の湯はいずれも諸病によしとある。「湯つぼ」（**図3**）の図の右下には「おびただしい人だなるほど日本一のめいとうだ」とあり、草津を日本一の「名湯」と位置付けている。

共同浴場と時間湯

草津温泉は、高温かつ強酸性で殺菌力があり、古来名湯として知られてきた。湯治に来た人びとは、日々共同浴場で入浴し、概ね3廻り（3週間）滞在した。草津温泉の絵図を経年的に検討していくと、1820年代から1850年代にかけて、煮川の湯、松の湯、千代の湯、瑠璃の湯、凪の湯などの共同浴場が増加したことがわかる。これは、文化・文政年間（1804～1830年）における草津温泉の繁栄ぶりが現れている。

1880年（明治13）出版の折田佐吉『草津温泉の古々路恵』では、瀧の湯、御座の湯、熱の湯、綿の湯、脚気の湯、鷲の湯、地蔵の湯、煮川の湯、松の湯、千代の湯など15の浴場を案内している。30年後の1910年（明治43）に作成された『吾妻郡草津町郷土誌』所収の「草津温泉市街地図」（**図4**）をみると、12の共同浴場が記されているほか、内湯を備えた20軒ほどの旅館を確認できる。はじめに地形図でみたように、市街地は湯畑を中心としたすり鉢状の土地に形成されており、規模の大きな旅館は湯畑の周りに立地していた。

この図には「上州草津温泉大図」に描かれていた綿の湯や脚気の湯がないが、1908年（明治41）に湯畑近辺で大火があったので、2つの浴場はその後まもなく廃止されたと考えられる。また湯畑南西の白旗の湯は、元は御座の湯のあった場所にある。御座の湯はハンセン病患者専用となっていたが、1887年（明治20）に市街地外縁の湯之沢をハンセン病患者専用の療養地区とする施策が進められ、御座の湯はそこに移り、跡に新築された浴場が白旗の湯となった（**図5**）。

ちなみに、草津の共同浴場は時間湯と普通湯の2つに分けられていた。「共同浴場の一覧」（**表2**）に示したように1923年（大正12）には、熱の湯などの時間湯が5カ所、瀧の湯などの普通湯が6カ所あった。時間湯は多くの湯治客が利用したために、普通湯に比べて収容力が大きく設備も整っていた。

表2 共同浴場の一覧

	1923年	1962年	現在	利用源泉
瀧の湯	○	◎	× 1972	
白旗の湯	○	○	○	白旗
熱の湯	○	△	△	熱の湯
鷲の湯	○	○	× 1969	
地蔵の湯	○	○	○	地蔵
煮川の湯	○	○	○	煮川
松の湯	○	× 1953		
千代の湯	○	○	○	湯畑
瑠璃の湯	○	○	○	湯畑
凪の湯	○	○	○	西の河原
関の湯	○	○	○	湯畑
千歳の湯		○ 1958	○	湯畑
長寿の湯		○ 1959	○	湯畑
巽の湯		○ 1959	○	湯畑
白嶺の湯		○ 1959	○	湯畑
睦の湯			○ 1965	湯畑
喜美の湯			○ 1968	湯畑
翁の湯			○ 1971	湯畑
恵の湯			○ 1978	万代鉱
つつじの湯			○ 1978	万代鉱
長栄の湯			○ 1981	万代鉱
こぶしの湯			○ 1991	万代鉱
碧の湯			○ 2012	万代鉱

◎は有料。熱の湯は観光施設。■は時間湯を行う浴場。×のあとは廃止年、○のあとは設置年を示す。場所を移動している浴場も含む。
布施廣雄『草津温泉案内』草津鉱泉取締所1923年、草津新聞社『草津躍進誌』草津新聞社1962年、草津町「共同浴場の移り変わり」『いでゆ』580号2013年

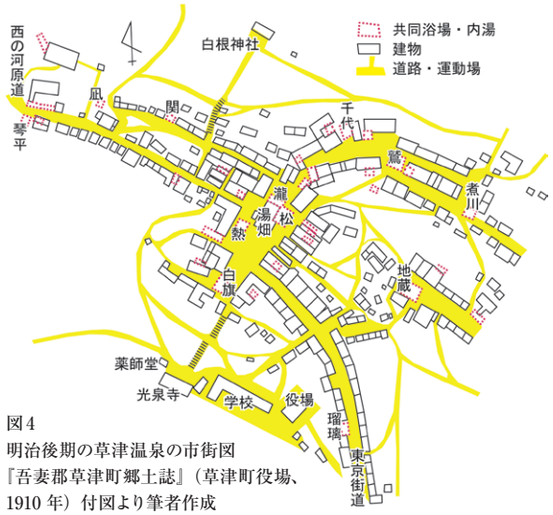


図4
明治後期の草津温泉の市街図
『吾妻郡草津町郷土誌』（草津町役場、1910年）付図より筆者作成

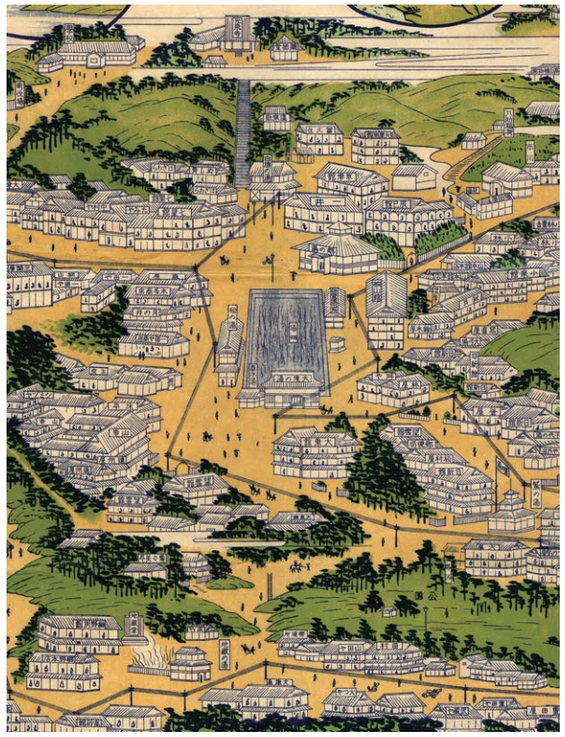


図5
戸丸国三郎「上州草津温泉真景図」部分、1922年（大正11）（筆者蔵）
図の上部に光泉寺、石段を下りたところに白旗の湯がある。中央にみえるのが湯畑で、その下部に「大滝の湯」、「真水湯」がみえる。本図には電線が描かれているが、草津水力電気株式会社の創立により電燈が使われるようになったのは1919年（大正8）のことであった。

時間湯は、草津独特の入浴法である。① みなで揃って板で湯をもみ、成分を均一にして温度を下げる、② 100 ～ 200 回、柄杓（ひしゃく）で頭部に湯をかける、③ 湯長の指示で高温の湯に 3 分間浸かる、これを 1 日 4 ～ 5 回繰り返すというものであった。

時間湯の始まりについては、2 つのエピソードで語られる（中村舜二『天下の草津温泉』大東京社、1936 年）。1875 年（明治 8）頃、講談師の桂円玉（燕玉）が熱の湯に入り、その合間に講談を聞かせて客を喜ばせた。そのうち誰彼となく彼を隊長と呼ぶようになった。彼は浴客が勝手に入れば湯が動き、熱さに耐えがたいから、共同に入浴して湯を動かさない案を提言し、それで話がまとまって、その音頭取りで入浴を行うようになった。1878 年（明治 11）、野島小八郎が草津に来て入浴法を研究し、1880 年に諸客に推されて湯長となって浴者を教導し、1888 年には役場の指令により熱の湯の管理人となった。野島については、亡くなった 1910 年に立てられた顕彰碑が光泉寺境内にあり、碑文にその来歴が記されている。

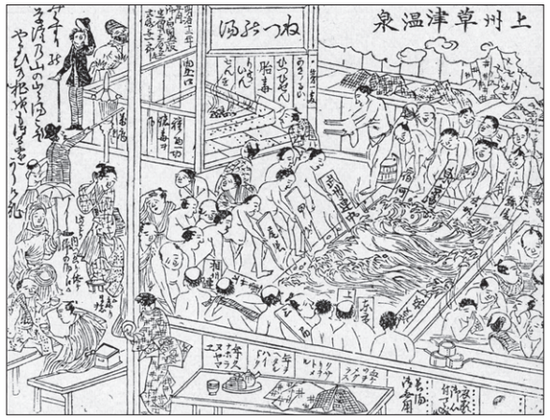


図 6　1879 年（明治 12）出版の熱の湯の絵図
西川義方『温泉と健康』南山堂書店、1932 年（昭和 7）所収（筆者蔵）
図中に「時間湯」の名称はみられない。

時間湯は熱の湯で始まった（**図 6**）。大槻文彦『復軒旅日記』（冨山房、1938 年）所収の「上毛温泉遊記」を読むと、大槻が訪問した 1879 年には入浴時間が 2 ～ 3 分間ばかりとなっていて、まだ 3 分と定まっていない。1884 年（明治 17）出版の長井文靖『上毛草津鉱泉独案内』によれば、「揃て三分」、「改正の二分」、「限つて一分」、「ちつくり御辛抱」、「最直（もうじき）です」、「そろそろ上りましよう」との号令によって時間の管理が始まっていること、鷲の湯と地蔵の湯でも時間湯が行われていたことがわかる。「時間湯」という名称は、1887 年の草津温泉改良議案の条文で確認できる（山村順次「草津温泉観光発達史」『草津温泉誌　第弐巻』草津町役場、1992 年）。

光泉寺

図 7　時間湯の内部　戸丸国三郎『草津温泉名勝写真帖』日本温泉協会代理部、1914 年（大正 3）（筆者蔵）

時間湯は草津の名物として、絵はがきや写真帖でも紹介されている。『草津温泉名勝写真帖』（1914 年）は 13 組の写真を掲載している。その 1 枚には、時間湯の著名なるものとして、熱の湯、鷲の湯、地蔵の湯、松の湯、白旗の湯の 5 つの共同浴場の外観を組写真にしている。また時間湯の内部は 3 ページにわたって取り上げており、湯もみ、かぶり湯、入浴の光景を掲載している（**図 7**）。

絵はがき「時間湯」（**図 8**）は 1940 年（昭和 15）に使用されたものである。筆者の手元には 4 通あって、差出人は七星館に宿泊しており、受取人は大阪市東成区に住む家族となっている。

1 通目は 11 月 9 日の消印があり、小包で送ってほしい品を記したあと、「明朝ヨリ時間湯ニハイリマス。今日昨日ハ一寸ヌルイ温泉ニハイツテイマス。七星館ハ内湯ガ有リマスカラ便利デス」と記している。草津に着いて間もなくの便りで、明日から時間湯に入ることを告げている。4 通目は 12 月 15 日付で、留守宅の伯母に宛て「私も大分良くなりましたが、後五六日もすればよいかと思います。沢足（ママ）温泉に三四日行き、廿五六日帰宅致し度くと思います」と書いている。仕上げの湯といわれた沢渡（さわたり）温泉に立ち寄って、25 日か 26 日に帰阪すると伝えており、2 カ月近い長期滞在だったことがわかる。

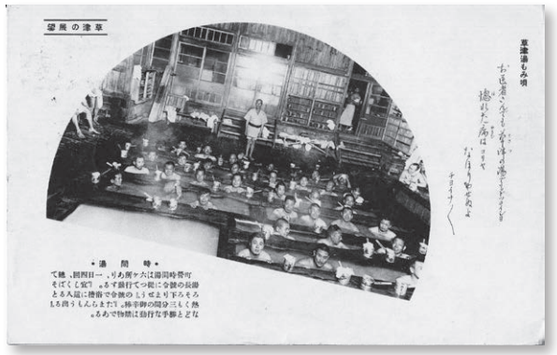


図 8　絵はがき「時間湯」（筆者蔵）　左下には、町営時間湯は 6 カ所、1 日 4 回、湯長の号令に従って行動するとある。

梅毒などの治療法が確立していなかった第二次世界大戦前には、もっぱら時間湯は病気療養を目的とした客に利用されており、自炊をする長期滞在客が主体となっていた。その他の遊覧客は、時間湯以外の共同浴場や旅館の内湯を使用していた。草津では、次第に内湯を備えた旅館が増えつつも、この時間湯

草津温泉の歴史地理

の存在によって共同浴場の重要性が高められていたといえる。

草津温泉において、療養目的の湯治客から遊覧客へと客層を広げていく大きな契機は、1926年（大正15）の草津電気鉄道開通にあった。これは軽井沢と草津温泉をつなぐ55.5kmの路線で、東京を朝一番に出れば夕刻には到着できるようになった。さらに1935年（昭和10）12月には渋川と草津を2時間半で結ぶ省営バスが営業を開始し、軽井沢から約3時間かかる鉄道よりも優位に立った。群馬鉄山のために開発された国鉄長野原線は、戦後、長野原駅（1991年に長野原草津口駅に改称）までの旅客輸送を始めて、駅から草津温泉までは国鉄バスにより結ばれた。

第二次世界大戦後、湯治客が大きく減って時間湯が縮小していった。「共同浴場の一覧」（**表2**）にあるように、松の湯は1953年（昭和28）に廃止され、その跡には足湯が設置されている。熱の湯は1960年（昭和35）から「湯もみと踊り」の実演を行う観光施設になった。1962年に時間湯が残っていたのは、鷲の湯と地蔵の湯のみであり、鷲の湯も1969年（昭和44）に廃止された。そうした中、地蔵の湯では時間湯が続けられ、千代の湯でも実施されていたが、湯長制度が2019年に廃止されたため、2023年（令和5）現在、時間湯は行われていない。

草津町による温泉の集中管理

草津の源泉はすべて自然湧出であり、豊富な湯量を誇る。しかし、強酸性で高温の温泉であるため、給湯パイプと耐酸性ポンプの技術が整うまでは、引湯は簡易な設備でしか行えなかった。旅館内に浴場を設けることは、自らの旅館の差別化・高級化を図り、より多くの宿泊客を獲得するために必要なことであった。しかし、1960年頃までは、湯畑からは自然流下が可能な範囲でしか引湯できず、市街地西方にある西の河原からは距離が遠く費用を要するために、零細な宿が内湯をもつことは困難であった。「草津町温泉給湯事業による給湯件数の推移」（**表3**）に示したように、1962年には、源泉から単独で引湯する旅館等は57件、共同引湯の旅館は19件で、合わせても76件にとどまっていた。

このような内湯旅館による独占的な温泉利用を転換させる大きな契機となったのが、引湯の技術革新と新たな源泉の取得であった。木管に替わる塩化ビニル・パイプは、1961年（昭和36）に湯畑周辺の全面舗装にともない、本格的に用いられるようになった。同時期に耐酸性ポンプの開発・試験も進められた。草津町では、1972年に町全体を集中管理方式にすることの方針を決定し、同年に現在も使用中の湯畑ポンプ所が建設された。ポンプによる動力圧送の開始が内湯旅館の増加をもたらした。

新たな源泉とは万代鉱源泉であり、温泉街の南西の山地で民間会社が硫黄鉱山の試掘中に大量・高温の熱水が噴出し、1972年に草津町が国有林野の使用許可を取って掘削・開発を行った。湯畑を上回る湧出量をもつ万代鉱源泉の引湯は、90度以上の熱湯をどう冷却するかが課題となった。そこで、草津町では加水処理ではなく、プレート式熱交換機を使用する方式をとった。温泉を水道水で約52度まで下げて浴用に配給する一方で、温められた水道水も温水として活用されている。万代鉱源泉は1974年に、温水は1976年（昭和51）に給湯が開始された。総世帯数に対する温水の普及率は約76%である（2022年現在）。

「草津町温泉給湯事業による給湯件数の推移」（**表3**）に示したように、ポンプ所設置後の1976年には湯畑源泉を引く旅館等が89件と大きく増えており、万代鉱源泉を使う旅館は37件で、全体では175件の旅館等に給湯されていた。

表3　草津町温泉給湯事業による給湯件数の推移

源泉名	1962年		1976年		1991年		2004年		2014年		2022年		2013年	
	旅館等	共同浴場	旅館等	共同浴場	旅館等	共同浴場	旅館等	共同浴場	旅館等	共同浴場	旅館等	共同浴場	温度	PH
湯畑	20 (4)	2	89	11	83	11	79	10	74	10	75	10	51.3	2.10
白旗	14 (2)	2	17	1	13	2	11	1	10	1	10	1	50.8	2.10
西の河原	12 (13)	6	21		16		10	1	8	1	9	1	51.0	2.10
地蔵	7 (0)	1	7	1	7	1	7	1	6	1	6	1	48.4	2.20
煮川	4 (0)	2	4	1	2	0	3	1	1	1	1	1	45.0	2.10
万代鉱			37		108	3	146	4	140	5	137	5	96.5	1.60
合計	57 (19)	13	175	14	229	17	256	18	239	19	238	19		

1962年の（　）の数値は共同引湯の件数。旅館等には保養所、研修所、リゾートマンション等を含む。
川島武宜・潮見俊隆・渡辺洋三編『温泉権の研究』勁草書房、1964年、270～343ページ、草津町役場資料より作成

こうして、長年にわたって内湯をもつことのできなかった旅館も温泉を利用できるようになった。湯畑など旧来の源泉の給湯件数については、1976年以降ほぼ変化がないのに対して、万代鉱源泉を利用する旅館等は2004年（平成16）までに大きく増加したことがわかる。万代鉱が給湯されるようになって、高原地域にホテル、ペンション、リゾートマンションの建設が進んだ。

草津町温泉使用条例と今日の共同浴場

草津町は、集中管理されている温泉量とそれを引湯する旅館数とも、全国的にみて規模の大きな温泉地と位置付けられる。温泉の集中管理は、草津町温泉使用条例に基づいて行われている。現在の草津町温泉使用条例は、2004年に制定、2018年に一部改正、施行されたもので、7つの章、41条からなっている。

この条例の目的は、草津町が所有・管理する温泉の保護、濫用の防止、利用の適正化を図るとともに、その源泉地域の観光資源的性格を保全することにある。温泉の引用は、草津町議会の議決をもって許可しており、個人利用の目的では温泉を引けない。そのため、町内に19カ所の共同浴場を設置して、住民に無料開放している。

「共同浴場の一覧」（**表2**）をみると、1972年の集中管理方式の導入前に7カ所の共同浴場が設置されていることがわかる。1960年代には、内湯をもたない旅館にとって、共同浴場は重要な施設であった。 現在、地域住民のための共同浴場はすべて無料で、住民によって管理・利用がなされている。これらは、住民が最寄りの浴場を気軽に利用できるように、住宅街の中にも点在する。例えば、最も新しい碧の湯は、市街地東南の別荘地区で廃業した宿泊施設を転用したものである。共同浴場の中で、現在、観光客に開放されているのは、白旗の湯、地蔵の湯、千代の湯の3カ所である。それぞれ利用源泉が異なるので、訪問の折にはぜひ試していただきたい。また、観光客向けの有料の浴場としては「大滝乃湯」、「御座之湯」、「西の河原露天風呂」がある。

草津町では、1987年（昭和62）からコンピュータを導入して各源泉の利用状態を把握できる一括管理方式が採用されており、源泉の管理、給湯ポンプやパイプの監視などが行われている。また、温泉熱を利用して、急勾配の箇所を中心に道路融雪（ロードヒーティング）を実施しており、その延長は14.59kmに及ぶ（2021年現在）。草津は寒冷地ゆえに、散水すると凍結しやすく危険なため、道路の下にパイプを埋めて、温泉や排湯の熱で雪を溶かしている。このように温泉の集中管理によって、源泉の保護、濫用の防止、利用の適正化を図り、かつ温泉熱の有効利用を実現している。

現在の温泉街

白旗源泉　源頼朝が発見したと伝わる源泉

「徳川八代将軍御汲上之湯」の碑　八代将軍・徳川吉宗が草津の湯を江戸に運ばせて入浴したことを伝える碑

西の河原公園　温泉街の西方にあり、至るところから源泉が湧出し、湯川となって流れている。

頼朝宮　白旗源泉内に鎮座する源頼朝を祀った祠

鬼の茶釜碑　鬼の茶釜は西の河原公園にあり、草津八景の一つに数えられた。

ベルツ碑　東京帝国大学で教鞭をとったベルツ博士は草津を世界に紹介した。

図9　絵はがき「湯畑」　昭和初期（筆者蔵）
塔屋（展望室）を備えた3階建ての旅館・山本館本店は現存し、国の登録有形文化財となっている。左端に熱の湯の一部、右に松の湯がみえるが、ともに1937年改築の新しい建物である。左手の「徳川八代将軍御汲上之湯」記念塔は1930年（昭和5）の建立と推察される。

図10　絵はがき「草津温泉場の全景」　昭和初期（筆者蔵）
中央に湯畑、その下部には1936年（昭和11）に改築された瀧の湯、その奥に松の湯、左手には板葺き石置き屋根の大東館がみえる。上部の高台には小学校がある。

草津温泉の歴史的景観を訪ねる

草津温泉の歴史的景観として、最も重要な地位にあるのは湯畑であり、湯樋（ゆどい）を通じて温泉水を冷ますとともに、湯の花も採取されている。湯畑とその周辺を構成する要素の中で、瀧の湯、綿の湯、脚気の湯、松の湯といった共同浴場は取り壊されて現在はない（**図9・10**）。打たせ湯であった瀧の湯があった場所は、湯が流れ落ちる滝壺となっており、松の湯の跡には足湯が設置されている。湯畑にある将軍御汲上（おくみあげ）の湯枠と「徳川八代将軍御汲上之湯」の碑、白旗源泉地と頼朝宮は現在もみることができる。湯畑に面した旅館では、山本館が昭和初期の温泉宿の姿を伝えている。

近世に作られた共同浴場で、ほぼ同じ場所に現存するのは、御座之湯、白旗の湯、熱乃湯、地蔵の湯、瑠璃の湯、凪の湯である。明治半ば、御座の湯の取り壊し後に白旗の湯が建てられたので、歴史的にみれば2つの浴場が並んだのは、2013年（平成25）に新たに御座之湯が建設されて初めて実現した。

千代の湯のある滝下通りに向かうと、2階3階に縁側を付けたようにする「せがい出し梁づくり」を再現した旅館が並んでいる。通りを東に進むと、Y字路の分岐点には「鷲乃湯跡」の碑が置かれている。また、西の河原公園は遊歩道が整備されており、格好の散策場所となっている。西の河原露天風呂に至るまでに、草津八景の一つであった鬼の茶釜、1935年建立のベルツ碑などがある。

草津の温泉街の地域スケールが小さくまとまっていることに加え、高低差が景観に変化を与えているため、草津は街歩きの魅力にあふれていると思う。共同浴場めぐりとあわせて楽しんでほしい。

注）共同浴場の名称は、それぞれの時期の一般的な表記を用いている。例えば、現在の施設名称としては「熱乃湯」となっているが、それ以前はもっぱら「熱の湯」が用いられていたので、あえて統一はしていない。

関戸 明子（せきど あきこ）／群馬大学教授。博士（文学）。専門は人文地理学・歴史地理学。主な著書に『近代ツーリズムと温泉』（ナカニシヤ出版、2007年）、『草津温泉の社会史』（青弓社、2018年）、共編著に『近代日本の視覚的経験－絵地図と古写真の世界－』（ナカニシヤ出版、2008年）がある。
草津の温泉街を歩く機会があれば、筆者による「草津温泉の野外巡検案内」（群馬大学教育実践研究38、11～25ページ、2021年）を参照してください。
URL: https://gunma-u.repo.nii.ac.jp/records/9307